Departure English Expression

『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』と『ジーニアス総合英語』を連係させた指導

山岡憲史

◆「英語表現」は表現力を伸ばしているか？

「コミュニケーションを支えるための文法」指導が求められる中，「英語表現」の授業はコミュニケーション能力を伸ばすという点においてまだまだ改善の余地があるように思われます。

「英語表現」の授業が文法の学習と結びつくのは必然のことです。授業では，文法規則を教師がテキストや総合参考書を使って解説をしたり，生徒自らに学習させたりして理解させます。続いて例文の音読などでそれを暗記させたり，演習問題を解かせたりするという手順で，その形式に習熟させます。その後は，その文法事項を使った表現活動をさせることが一般的です。

このような Presentation－Practice－Production というプロセスはどれも大切ですが，そうした手順を踏んで丁寧に指導しているつもりでも，生徒たちが文法的に正しい英文を書いたり話したりできるようになることはかなり難しいのが実情です。それを改善するには次の 3 点が肝要と考えます。

まず 1 点目は，個々の文法項目が持つ形式と意味を説明するだけでなく，それがどのような場面でどのような意図や心理を表すために使われるのかという，言語の使用場面と機能をしっかりと理解させることです。生徒が学んだ文法事項を使うべき場面でそれを援用できなかったり間違えたりすることは非常によくあることです。指導においては，文法形式の意味だけでなく，文法の機能を十分熟知させなければなりません。

2 点目として，上のような理解をさせた後に，生徒の個人的あるいは知的な好奇心を刺激する例文を豊富に与えてインプットすることが大切です。イメージが湧く文脈の中で多くの使用例に触れることによって理解可能なインプットを増やし，思考力を鍛え強化することが求められます。学習した内容をさまざまな文脈の中で再確認させながら，十分なイメージを持たせることは，文脈のない例文を無目的に暗記させるよりはるかに効果があるでしょう。

3 点目として，十分なインプットをした後，自らが表現したい内容について書いたり話したりする活動が必要です。表現するテーマを personalize することによって，生徒が表現したいと思った意見や伝えたい体験を話したり書いたりすることができます。想像力を働かせ，自分の考えを表明できるテーマであることが肝要です。

◆『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』の学習を『ジーニアス総合英語』で深める

『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』では文法項目を初版より大きく充実させました。しかし，教科書の宿命上，それぞれの例文には簡単な解説を施しているにすぎません。これを補うのが『ジーニアス総合英語』です。この参考書の最大の特徴は，「語法のジーニアス」と定評がある『ジーニアス英和辞典』の方針を受け継ぐ文法の usage の解説にあります。形式の持つ機能の記述が充実しており，いかなる文脈で何を伝えたいかという，コミュニケーションの際に大切なことを理解するのを大いに助けてくれます。

例えば，『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』では had better に関して「**「～しなさい，さもないと…」という含みを持つ**」という解説がありますが，『ジーニアス総合英語』では，「**ふつう，そうしなければ悪いことが起こるという含みがある。特に you had better ... は，文脈や言い方によっては「警告・脅し」の意味になることがあるので，立場が上の人や年上の人に使うのは避けた方がよい。下降調で発音すると「忠告」になるが，下降上昇調で読むと「警告・脅し」になる。「忠告」を表すには I think you should ... などの表現を使う方が無難である。**」と詳しく書かれています。

また，『ジーニアス総合英語』は，生徒が間違いやすい点にも配慮が行き届いています。例えば，「**I have more books than Tom. を ×I have books more than Tom. のようにしてはいけない／知覚動詞の listen to, watch は受動態にしないのがふつう。**」のような解説です。理解の段階では，ポイントを押さえて，このような箇所を参照させ，コミュニケーションへの方向付けをすることができます。

◆『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』でインプット・アウトプットする

『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』は，高校生の知的関心に訴えるテーマを各章に設け，そのテーマに沿った例文が挙げられています。これらは，実際にそのテーマで表現する際の例であり，内容的に同一のカテゴリーに属する文脈の中で豊富なインプットを与え，生産的な場面での使用を促すことができるのです。この教科書の指導資料類（*Teacher's Manual*，*Teacher's Book*）や副教材（『グラマーノート』2種）では文法項目の横に『ジーニアス総合英語』の対応箇所を示すという工夫を行って，『ジーニアス総合英語』との連係を図っていますので，両者を比較して読ませることによって，学んだ基礎がより高度な文脈で使えるという理解へとつなげることができ，生徒の表現力を豊かにすることでしょう。

「総合参考書と教科書が同じ例文であれば暗唱させやすい。」という声もあります。しかし，文脈の伴わない同じ例文をたくさん暗唱させたとしても，インプットは脆弱で頭の中に強固なネットワークはできず，暗唱直後のテスト後しばらくすれば記憶から抜け落ちてしまうでしょう。形式を多様な文脈で確認し，表現したい内容で用いることこそ確かな定着のカギだと思います。

『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』では，例文で学んだ後，形式定着のための演習があります。これもすべてそのレッスンのテーマに沿った内容であり，その後のリスニング，リーディング活動でも，そのレッスンの文法事項を散りばめています。このように，生徒たちが同じテーマの異なった文脈や使用場面での英文に接しながら，気づきを豊かにすることを目指しています。

さらに，自己表現活動でも，そのレッスンの文法事項を使い，そのレッスンのテーマに沿った生徒の表現意欲を刺激するトピックを設定し，丁寧な手順を踏んで英文を書く・話すというプロセスを重視しています。

＊　＊　＊

『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』で学んだ文法知識を『ジーニアス総合英語』で深めて，コミュニケーションで使える文法として実感させ，それを糧にして『*Departure* 英語表現Ⅰ改訂版』でさまざまな自己表現活動をさせてほしいと思います。暗唱が必要であれば，この教科書の例文を指定することによって，文法形式だけでなく，その課のテーマに関連した語彙も習得することができます。生徒にとっては単純な英文ではないため負荷が高いでしょうが，理解と知的な関心を植え付ければ，やりがいのある学習となることでしょう。

（やまおか　けんじ・立命館大学教授）